
この願いが届くのならば……

朧月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この願いが届くのならば……

【Nコード】

N5200C

【作者名】

朧月

【あらすじ】

——工藤君、あなたに会ってからもう一年。あれから、変わった事も、不変な事もあった。前よりも沢山笑えるようになった私は幸せ。でも、あなたは昔と何か変わってしまったの？変えたのが私のせいなら、もうこれっきり。暖かい腕の中で、願う事はたった一つ。張り裂けそうな思い、届いていますか？——灰原哀小学二年生の夏。この一瞬一瞬が、何より幸せだった……

プロローグ..『カナシミとネガイ』（前書き）

朧月です、こんばんは！

えーと、前書きに何かを書くのは初めてです。私自身、新蘭系を書く事が多いので、今回は注釈を。

※このお話は、さほど強くはないにせよ、コ哀要素を含んでおります。

そして蘭ちゃん、出番ない確率も高いです。断固新蘭派の方はご覧にならない事をおススメいたします。

プロローグ…『カナシミとネガイ』

「灰原っ、灰原アアアア!!」

そんなに、必死で叫ばなくても、ちゃんと聞こえてるわ。

もう、目に映る世界は殆ど色がない中で、耳に届くその声は確かに心地いいけど。

私、段々暗い闇の中に落ちていくみたい。

でも、伝わる温もりが暖かいから、何とか、まだここに居る事が出来る。

暖かい彼の手が、私の首を抱いて持ち上げている。

「……ねえ? ねえ、工藤くん……」

伝えたい、事があるの。この右腕が、もし、動いたら。

目一杯の力を、腕いっぱいに込めた。ふっと、腕が浮いたのが判る。ねえ、工藤君……どこ? ふらふら彷徨う手で、必死で探した。

ぺたり、探していた彼の右頬に着地した手は、力強く、ぎゅっと握られた。

でも、工藤君の手、震えてるの?

「ここに居るよ! しっかりしろ。もうすぐ、助けがくるから」

そんな風にされたら、希薄だった筈の生きたい意欲が、強く刺激されるでしょ?

ダメ、もう助からない私に、それは反則よ。

生まれた時からあんな場所に居て、お姉ちゃんも失って、孤独だったまま終わる筈だったのよ。

でも、あなたに会えてよかった。工藤君に会えたから、私はこんな

にも幸せになれた。

だから、別れはどんな形でも、身を引き裂かれそうね。

「工藤君……？ わたし、頑張った……でしょ？」

搾り出した声、届いてる？ 精一杯の言葉は、ちゃんと伝わってる？

ねえ、工藤君。私、本当はもっと沢山伝えたいの。

もっと、工藤君の声を聞いて、沢山触れ合って、笑いあって、そんな未来を夢見たのよ？

だから、こんな所で、本当は死にたくない。でも。

「こ、これが、精一杯よ……残念だけど。でも、これで……やっと」
「灰原ッ！」

険しいけれど、優しくて温かみのある声。

もっと、叫んで。耳に焼き付けて、いつでも思い出したいの。

声も温もりも、私の耳に何度でも再生できるように。

だって、もうこれでお別れだから。

「やっと、全てが……。終わる、のね」

「バーロ！ こんな終わり方っておかしいだろ！ オレも、お前も、納得できるわけねーだろ？」

納得できないけど、それはそれで幸せよ？ だって、願いが一つ叶ったから。

私が頑張った事が、初めて結果を生んだの。

「わ、私が居なくても、あなたは何も変わらないで、元に戻った体であの子と会う……それでいいのよ」

「おい！ オメー何馬鹿な事を！」

「だって、そうでしょ？ 私は元々あなたの、傍にいなかった……だから」

私だって、本当は生きたいのよ？

本当は、こんな所で手放したくない。

彼の隣で、ずっと最後まで一緒に居れたらどんなにいいか。

でも、もう私の意志では、指先さえも動いてくれない。少しずつ、世界が沈んでいくの。

なら、誰も悲しませずに終わるわ。

「最初に、戻るだけ……く、工藤君……解毒剤の、元となるデータは、ほ、殆ど私のパソコンの中にあるわ」

博士の家の地下に、必死で重ねた研究は眠っている。

薬が手に入ったんだから、博士の知識と工藤君の頭脳を合わせれば出来るわよね？

「完成するわ……ひ、悲願の、薬」

不思議ね。

それは、江戸川コナンと灰原哀、両方に別れを告げる意味。

完成したい反面、一生できなければって思ったりしたのに。今更悲願の薬だなんて。

「でも、これで、やっと……恩返しと罪滅ぼしが、出来るわね」

これなら、お姉ちゃんにも堂々と会える。

諦めなくて、よかった。解毒剤も完成しないまま、胸張って会えないものね。

「お礼を、言えばいいのか……謝ればいいのか、どっちか考えてたけど……」

「あん？」

「し、謝罪の言葉は、あなたは喜ばないから……だから、ありがとう」

「バーローッ！ 何言ってるんだよ！ 全てを終わらせて幸せになるのが一番の恩返しで罪滅ぼししろ！？」

私に、こんなに暖かい最期があるなんてね……心が、すごく優しい気持ちになってくわ。

ほら、こんなに口元が緩んでく……私の感覚だけの笑みだけど、ちゃんと形になってる？

工藤君、ありがとう。

ねえ、もし最後にもう一度だけ、私にチャンスがもらえたら。

……最後の、たった一つお願い。

ねえ、届いてる？ 最後の、さいごの……

プロローグ..『カナシミとネガイ』（後書き）

☆作者より☆

というわけで、こんにちは！朧月と申しますV

初めての方はまず初めまして。既にお知り合いの方は、今回もまた有難う御座います！

私には凄く珍しい事なのですが、『パンドラ』の方が捗らず、哀ちゃんもつと頑張れ！と気分転換も兼ねて、いつもと違うカップリングに挑戦と言う事で。

でも、コテコテなコ哀を期待している方は申し訳御座いません（へ

ーへ；

そして、初っ端からこんな展開申し訳御座いません（苦笑）

で、でもそんなに酷い事にはしない筈ですから（へへ；

5話かそこら位で終わる話だと思うのですが、のんびりマイペースになると思うのですが、それでももしお付き合いいただけたなら嬉しいですよV

ストックもあるのですが、改めて推敲したら出させていただきます。

FILE 01..『ドウヨウとヘンカ』

学校が終わった午後の風景の中、たった一人図書室で彼はとある小説を探していた。

珍しく、推理小説ではないのだが、事件に使う資料として必要なものの。

それを知っていたから、彼が整えて教室に置きっぱなしにしていた帰り支度の荷物を持って、そこへ向かった。

静かだった放課後の図書室の中に、ドア越しにうろつく彼が見えて、それはどこか滑稽に映った。

「調べごと？」

思い切ってドアを開け、後ろから声をかけてみると、彼ははつとした顔で振り返った。

きょんとした顔で一秒程此方を見つめた彼は、ふっと苦い笑みを浮かべ、頷いた。

「ああ、事件に使う資料なんだ。オメーも一緒に探してくれたら助かるけど」

「はいはい。いいわよ、最近の名探偵さんの助手も楽しくなって来たし」

肩をすくめてそう応えると、冗談交じりの皮肉が返って来る。

共に協力しあう仲間というか。こんな関係が、きつと二人にとって最良のものだと思う。

最近、自分でも判る程、人前でよく笑うようになった。

昔のような小さく零す薄笑いではなく、本当に楽しそうに顔の筋肉を崩して笑う。

そうなってから、ようやくそれが本来のあるべき女の子という姿なのだと気づかされた。

一番目、二番目と端から順に本棚を漁って、三番目の本棚にようやくそれを見つけた。

「あ、あったわよ。これでいいんでしょう？」

「おう！　ありがとな」

目一杯背伸びして取った本を手渡すと、それを確認した彼は嬉しそうに笑った。

確かに探していた本だと礼を言って、早速調べだす。
顔を見れば判る、好奇心が湧き出してどうしようもない彼の様子がわくわくしているような、ドキドキしているような、そんな感情が伝わってくる。

見ていると、此方も自然と柔らかな笑みが浮かんだ。

「今日は、誰かと帰るの？」

「いや、一人だよ。皆には先帰ってもらってるし」

彼は貸し出しカードを引っ張り出して、そこに今日の日付を書き込み、自分の名前の中につっこんだ。

一連の作業で振り向きもせずに応えた彼の様子を後ろから見つめながら、自然を装って尋ねた。

「もう、終わりなんでしょ？　なら一緒に帰らない？」

「あ？　ああ、いいけど。珍しいな、オメーが誘ってくるなんて」

「そう？　たまにはいいんじゃないかしら」

自分でも、珍しい事だと思う。だからこそ、いつもより鼓動は少し速まり気味に刻まれた。

平静を装いつつ、肩をすくめるついでに、彼に持ってきた荷物を渡した。

受け取ってその本も詰めて背負い、行くか、と手をとられる。一瞬手の筋肉がこわばったのを、彼が気づいたかどうかは判らないけれど。

二人で図書室を出て、学校を出て、いつも通りの帰り道を歩いた。

「もう、一年経つのね。私達が出会った時から」

二人の歩調もゆっくりになった頃、徐に話を切り出すと彼はきよと、とした顔を浮かべ此方を見た。

感慨深い話をするタイプにも思っていなかったという所だと思うけれど。

少し戸惑った彼の顔に静かな笑みが映るまで、さほど時間は掛からなかった。

「そうだな。そっか、一年。確かに前もオレも、大分変わったよな」

「……そう？ 私は確かに変わったかもしれないけど、あなたは何も変わらないわ。最初から」

「……あんだあ？ 進歩ない奴みたいに言うんじゃないよ」

少し不機嫌になった様子の彼に、くすつと冷笑を返す。彼は更に不機嫌に口を尖らせた。

そう。彼は変わらず真実を追い求め、その吸い込まれそうになる瞳で見つめてくる。

正義感と優しさに溢れながらも、たまに見せる信じられない子供っぽさもそのまま。

そして、変わらず大切な人の事を思い続けている。

初めて会った時からそうだった。それなのに、必死でひたむきに守

つてくれようとする。

だから、勿論彼に進歩がないわけではない。いい意味で変わらな
い彼と、いい意味で変わった自分。

自分はそんな彼に感化されて変わって行った。明るく暖かい世界に。
だから、今こうしてくすくす、楽しい笑い声を立てる事が出来る。

「悪い意味で言ったつもりはないけど。私からすれば、随分子供に
変わりないわね。

暗号にきらきら目を輝かせるのも、初めて会った時から全然変わら
ないでしょ？」

「うっせーな！ オレも日々変わってんだよ。……一年も経てば、
考え方だって変わる」

むっつりとそう応えて、二歩三步と先を歩く彼の姿に、再び笑み
が漏れる。しかし、ぴた、と足を止めて振り向いた彼の真剣な表情
がそこにあった。先ほどまで気にならなかったヒグラシの鳴き声が、
やけにうるさく響いている。

「一年経ちや変わるんだよ。オレだって、前より冗談も上手くなっ
たんだぜ？」

真剣な顔つきと真剣な口調に、たじろがずには居られない。

何を言うかと思ったら、冗談だなんて。けれど上手く茶化す言葉が
見つからない。

「……あ、あら。例えばどんな冗談？」

狼狽しながらも何とか切り返すが、静かに俯いた彼が、少し怖い。
そう思っていたけれども、顔を上げた彼には、自嘲的な笑みが浮か
んでいた。

「オレは、お前の事が好きだ」

時が止まった。混乱するあまり。同時に、頭の中が真っ白になった。

落ち着け、何度も自分に言い聞かせた。確かに、彼は冗談だと言ったのだから。けれども、その冗談は、こんな表情でいう言葉じゃない。

何と応えていいのかわからず、彼も何も言わないせいで長い沈黙が訪れた。

そのまま、数秒、十数秒、数十秒。一分経つか経たないかの所で、ようやく彼はくると背を向けた。

そして、掠れるような声で、ぽつりと付け加え呟いた。

「……………友達として。仲間として。大好きだ」

ただ、その台詞を口にした後は、先ほどまでの辛そうな表情と声は何処へ消えたか。

数歩歩いた後、振り向いた彼は穏やかな顔で笑っていた。

「な？ 上手くなっただろ、冗談」

「……………そ、そうね。さすがにビックリした、わ」

冗談と言われても冷静に戻れないのは何故なのだろう。

彼の表情が、笑っているのにどこか哀しげに映るのは、何故なのだろう。

疑問で頭の中が一杯になりながら、彼の後ろをついていった記憶だけが、そこから家までにある記憶だった。

どうして、あんな事を言ったのか……………判らなくて錯乱した。忘れて、平常心に戻ろうと必死でパソコンを叩いた。

完成しかけた薬の研究が、混乱した頭でぐちゃぐちゃになりそうになって、何度となく困却した。

「どういう意味で言ったの？ 工藤君」

全く集中できずに、とりあえず電源を落として正面にあるベッドに飛び込んだ。

悶々とする考えの中で、気が付いたらそのまま眠りについていて。彼と初めて会った時の夢を見た。

それは、転校していった教室ではなく、大切な姉の死を知らせる新聞の中で。

あの頃、彼の事を憎んだ。この人はお姉ちゃんを助けてくれなかった人なのだ、と。

それが、いつから変わってしまったのか。

いつからそんなに、彼の事ばかり考えるようになってしまったのか。謝罪心だけだった筈の感情は、いつから恋愛へと変わっていったのか。

多分、崩れ始めたのはそこからだった。そこから、おかしくなってしまう行った。

FILE 01..『ドウヨウとヘンカ』（後書き）

☆作者より☆

あんな事をさっきは言っておきながら、やっぱりプロログで待たせるのはちよつとせこいと思ひまして。

第一話、投稿しちゃいました。

プロログとは場面も変わり、日常風景からのスタートです。

普段しない事をするものだから、もう反応が恐ろしくてなりませんです。ドキドキビクビクしております（へーへ；

出すのも、相当悩んだ結果です。（でも、HPにはこれは出せない……）

というわけで、今回一話も見てくださったと言う事は、とりあえずすぐリターンせずに、続きを見て下さる気になったと考えて。

様子見でもなんでも、凄く嬉しいです！

ありがとうございますvそして、次回以降も頑張りますので、どうぞよろしくお願い致します。

FILE 02..『ニチジョウとヘイワ』

目が覚めた時、もうそこにある目覚まし時計の短針は記憶よりも六時間ほど進んでいた。

午後十時。博士が居ないところも簡単に夕食を抜いてしまうのか、と長息する。

博士は知り合いに誘われた科学者間での集まりだかなんだかで、二日間家を開けると言った。

明日の昼頃帰る予定と零し、心配しながら出て行っただが、これではどうしようもない。

「私は悪くないわ……工藤君のせいよ」

ぼさぼさに寝癖のついた髪をかきあげ、体を起こす。

何か軽いものでも食べようかと迷い、キッチンの冷蔵庫からバナナを見つけて取り出した。

つい口から出るあくびを誤魔化しながら、スローペースで一口一口と食べた。

「これで、胸張って一日三食食べたって言えるわね」

ちゃんと食事をしたかと聞かれた時の対策。まあ、聞こえは悪いが。

それでもバナナだって立派な食料だ。誰にも文句は言わせない。全部はおぼったところで、気だるげに伸びをした。

予想外の六時間の睡眠で、これからまた寝るのも中々難しい。

まだ午後の十時だ。博士なら起きている筈。考えて、そんな結論に辿り着いた。

『おー、哀君か！』

電話に出た博士は、自分が知っているよりもご機嫌だった。

元々そういう明るさとノリが良い事が売りの人間が更にご機嫌モードだと、その大きな声が少しうざったい。

受話器からほんの少し耳を離し、顔をしかめた事は、電話の向こうに居る博士は全く知らないだろう。

『どうしたんじゃ？ 哀君から電話くれるなんて嬉しいのお！』

「え、ええ。どうしてるかしらと思って」

無駄にテンションの高い彼に、たじろぎながらもそう返した。

『予定通り、明日の昼には帰る予定じゃよ。いやー、すっかり盛り上がってしまったてな』

「……みたいね」

温度差のある白けた返事を返しても、通話中の彼のご機嫌モードは一向に変わる事はなく。

料理であれを食べた、これを食べたと嬉しそうに報告する彼に、一言ツッコミを入れたくなった。

「博士、お肉料理の食べすぎね。……帰ったら、沢山野菜料理をプレゼントしてあげるわ」

彼が少し困惑した空気が受話器越しにも伝わった。

恐らく、調子に乗って食べたものを暴露した事を、後悔している事だろう。

『あ、哀君。野菜もいいんじやが……たまには高カロリーなこつてりしたものを……』

「だ、め、よ」

懇願する彼に、きっぱりと告げる。

「博士は、そもそもがカロリーのとりすぎなんだから。そのままじや生活習慣病まっしぐらよ？」

だから私がちゃんと栄養管理してあげるって、低カロリーの美味しい料理作ってあげてるでしょ？」

『哀君。せめて一週間に一度位は……ワシに愛の手を恵んで欲しいんじやが』

必死な様子が伝わってきて、何だかおかしくなった。

思わず忍び笑いをすると、向こうにも聞こえたようで、受話器からすねたような声が返ってくる。

「甘いわね。まあ、博士が高木刑事並に痩せたら、考えてあげなくもないけど？」

『た、高木刑事！？　む、無理じゃよそれは……』

慌てて答える博士に、じゃあ一生肉料理は食べさせられないわね、と告げてまたクスクス笑いが漏れた。

そう。偶然にもココに来て、やるべき事は二つと考えていた。

一つは当然解毒剤の研究。もう一つ……彼の食事には少し使命感を感じていた。

単に、お肉料理が食べられずに地団駄踏む博士が面白いという思いも、無きにしも非ずだが。

「博士を健康的なスリム体系にする事は、私のちょっとした夢で目標なのよ？」

『そ、そんな夢は持たんでいいんじゃない？　ならせめて、目暮警部くらいにしないかのお？』

「それじゃあ、何も変わってないじゃない」

どんぐりの背比べのような二つの体系に、思わず失笑した。いや、させられたと言う方が正しいか。

今更だが、博士との電話は嫌いじゃない。そんな楽しく話しているうちに、気が付いたら時間が潰せているのだから。

電話の彼とはとりあえず別れとお休みなさいの挨拶を済ませ、電話を切る時には微笑が浮かんでいた。

いつの間に、こんなに日常が楽しくなったのかと考えると、自分でも少し意外だ。

一年前はそんな事、考えもしなかったけれど。今となっては、ただこの幸せを守りたいと考えるのみ。

大切にしていきたい。組織から抜けて、灰原哀として出会った人達の事を。

「それに、何期待してるのかしら、私」

呟いてから目を伏せた。自嘲する笑みが自然と口元に浮かぶ。

「ちゃんと、冗談って言ってたじゃない。友達として、仲間としてとも言ってたし。」

それ以外のなにものでもないし、あっていい筈がないわ。

彼とは、最後まで仲間で……共に組織を倒す目標を持った戦友。その肩書き以上でも以下でもありえないもの」

彼には、ちゃんと居る。大切な女が^{ひと}。

その思いの強さがどれだけのものか、一年も一緒に居たら充分すぎる程伝わってくる。

どれだけ、お互い思い、想われているかという事が。

「全く。馬鹿馬鹿しい悩みね」

気持ち振り切る意味で、天井を仰ぎ見ながら大息した。

明日学校なのだし、こんな時は寝てしまおうという考えに達し、また大きく気伸びする。

今度はちゃんと布団に入り、電気を消して、物思いにふけりながらも眠りについた。

翌朝は、また雲ひとつない快晴だった。

いや、快いや気持ちいいと言った言葉には無縁の気温で、連日続く猛暑から継続して暑い日だ。

テレビのニュースをつけて知った最高気温は三十八度。冗談じゃない。

「暑さには何故か弱そうな探偵さん辺り、今日は不機嫌な一日になりそうね」

背格好が小型で痩せている割に、サッカーで鍛えていた割に、普段活動的で格好いい姿とは裏腹。

夏場に、四六時中暑い暑いとだれる姿が、らしいというか、らしくないというか。

今日もまた、汗だくで机に突っ伏し、団扇を仰いでいる彼の様を浮

かべると何やら面白い。

身支度を整え、簡単に朝食を済まして家を出てすぐに、室外独特の暑さに顔が歪んだ。

それでも、家に居た頃よりも少し不機嫌になりながら歩いていると、後ろから声がかかった。

「よお、灰原」

「……工藤君」

振り向くと、昨日から思考の大多数を占めていた彼がそこに居た。いかにも暑っ苦しそうに片手で顔を扇ぎながら、彼は小走りで隣に追いついた。

そして、一緒に行こうとも何も言わず、当然のように歩幅をあわせて歩く。

「どうでもいいけどよ。んなゆっくり歩いてっと、遅刻しちまうぞ？」

「なら、先に行けば？ 待ってほしいなんて、私一言も頼んでないわよ」

「あのなあ……」

彼を一瞥して冷たく言い放った言葉に、大きく脱力した声が零れた。

よかった、いつも通りだ、と内心ほっとした。

折角いい具合に気持ちの整理が付いたところで、彼に妙な態度をとられては溜まらない。

やはり、気にするような事ではなかったと、安心した反面、少し残念だった。

あまりに彼が真面目な態度で話すから、混乱してしまったただけだと。

「わぁーったよ、おめーの歩くペース信じてやつから。遅刻したら承知しねーぞ？」

「はいはい。信じてくれたならさっさと行きましょ、探偵さん」

そう言って、少し歩調を速めて見せると、彼は「ったく」と短く文句を言ってからついてきた。

学校への道中で、他の探偵団の三人とも鉢合わせ、五人で小学校への道を歩く。

響くのは、ジリジリうるさいせみの声と、談笑を交わす楽しい声。だから、こんな普段どおり過ぎる日常を、もうすっかり信じきっていたのだ。

これは揺らぐことがない、新しい大切な居場所なのだ、と。

FILE 02..『ニチジョウとヘイワ』（後書き）

☆作者より☆

こんにちは、第二話です。

連載開始時には既に出来ていましたが、少しだけ間を空けて投稿させていただきました。

今回もまたお読みいただけて幸せですv

博士との電話のターンが殆どで、無駄話に感じるかもしれませんが、無駄なつもりはありません。

一応、これでも重要な意味を狙ったものがあります^^
それを見つけていただけたなら幸せですがv

というわけで、まだ上手く話が見えてこない事でしょう。

頑張って、コ哀ファンの方にも認めていただける文が作れると嬉しいのですが……そうでない方にも、読みやすく思えるものであるように。

そして、楽しく感じていただけたのであれば、私はこれ以上ない幸せなのです。

さて、次話からは少し話を動かそうかと。

また4話目のストックが溜まって、5話目に突入したら出そうと思っっています。

感想をいただけた際には、執筆の活力に変えさせていただきますね
v v

それでは、また次話もお楽しみいただけたら幸いですv

FILE 03..『キモチとケジメ』

給食を食べ終えた後の二十分休みがまさに終わりを告げようとしていた。

予鈴が鳴るまで、後二―三分ほど。

本鈴のチャイムがなる頃には、皆教室の自分の席に戻っていなければならぬ。

生徒達は殆ど外へ遊びに出かけ、元太に光彦も、猛暑だというのに野球をやるんだと張り切っていた。

そんな彼らの張り切り具合を思い出して、哀は溜め息をついた。子供達は元気だ。呆れるほどに。

トイレに立った自分も教室に戻ろうとするまさにその時、教室内から聞こえてきた話声に、彼女は思わず立ち止まった。

開けるのを躊躇した戸の向こうでは、教室に残った歩美と彼が話している声が聞こえた。

まだ、教室の中には二人しか居ないのに何を話しかけているのかとか。

彼女が彼を呼びとめた姿を見ていたから、そんな事はさほど気にして居なかった。

ただ、そこで立ち止まる事になったのは、聞こえてきたその話の内容のせい。

「言っただね、コナン君」

「……ああ。昨日、言っただよ」

答えた声が、何故か物悲しげに聞こえた。

昨日の事が何なのか、中途半端な情報しか入ってはこなかったけれど。

ガラ、と窓を開ける音が聞こえた。窓際によりかかり話す様子が浮かぶ。

「歩美の想像、やっぱり当たってたんだよね……」

「歩美ちゃんの、鋭さにはたまに凄く驚かされるよ」

ハハハ、と彼が苦笑いするのも聞こえてくる。

ざわざわと騒がしい声が聞こえてきたら彼らは話をやめた事だろう。それこそ、自分が今この戸に手をかけて、教室に戻っても同じ事。けれども、何となく教室に入る空気ではなかった。

「驚いてたでしょ？」

「そうだな……けど、冗談って事にしたから」

小さく零した彼の台詞に、驚いたのはその教室内に居る少女だけではない。

昨日の出来事を思い出して、つい固まった。

冗談にしたと聞いて思い浮かぶ出来事なんて、たかが知れている。

「ど、どうして!？」

慌てて叫ぶ声が聞こえた。言いよどむように、はっきりしない返事をした彼が答える。

「色々あって、簡単にはいかねーんだ。……冗談で済ませたかった」
「そんなのないよ! だって、コナン君は歩美の事……っ」

泣きそうな叫びが耳に届いて、思わず戸にかけた手の力が強まった。

開けてしまいたいと思う気持ちと、そこでじっと事の顛末を聞きた

いと思う気持ちと。

数秒葛藤した末、手を離れた。中の彼らは、その事に全く気づいていないようで、話は続いた。

「ごめんね、歩美ちゃん。オレだって思うよ。もしもって。でも……」

「何で？ 怖いのか？ 伝えた後の事が？」

「ちょっと違うけど、それもあるかな？ もし、アイツがそういう態度見せていたら……」

それを話す彼の声は、まるでアイツの涙なんか見たくない、彼女の事を語った時と同じように思えた。悲しくて、優しい気持ちから来る台詞。

心臓が、大きく鼓動した。何となく、この会話の背景が見えてしまった。

「何があっても、裏切れない人が居るんだ。だから」

「それって、歩美より大切な人？ 誰よりも？」

必死な様子が伝わる。

何のために、ココまであの幼い少女が必死にならなければならないのだろうか、扉越しで胸が痛んだ。

困ったように数秒間沈黙した彼が、重たく「そうだね」と答えたのを聞いて、誰の事だか理解してしまう。

長い黒髪と、笑顔が特徴な、みんなの人気者のイルカ。前にそう表現した彼女の事だと言う事が。

「それがコナン君の、はじめなの？」

「……はじめか。そんな言葉も当て嵌まるな。こうやって、歩美ちゃんにそれを話しているのも」

最後の方の会話は、よく判らなかつた。予鈴が鳴る音と共に二人の話し声は途絶え、それから少し間を置いて、タイミングを計らつて戸を開けた。

教室に居た二人は、どこか気まずそうに出迎えた。

やはりそれは、先ほどまで話していたのが昨日の話だという事を肯定する。

それでも、何も知らなければ自分自身も違和感に気づくことはなかつただろう。

知ってしまったから、少し歯車が狂つた。それが、普通の事ではないと言う事を。

夏の昼の授業というのは、はつきり言つて辛い。

教室内は、むらむらと蒸し暑さに支配され、外から聞こえてくるせみの音が、余計に暑さを盛り上げる。

そんな時に、小学生の算数なんて、正直やっていられない。

「この問題、わかるかな？」

二年になつても、変わらず自分達の担任を務める小林が、黒板に書いた問題を指して言った。

『あやちゃんは、500円持っていて、60円のおかしを7つかいました。おつりはいくらでしょう。』

そんなような単純な問題でも、彼らにとっては悩みどころらしい。

うーん、と唸りながら首をひねり、中々挙手がされない。

埒が明かないと思ったのか、一番端の子から順に指されていった。

彼もそうだけれども、偶然自分達の所に難しい問題が当たった時、あっさり答えていいものか迷う。

だから、判っている問題をわざと少しだけ間を空けたり、考え込んだりして答えるのだ。

ただ、この時は別の事で頭が一杯で、黒板に書かれたその日一番の難問を、当てられると同時に即答してしまった。

隣で彼が、おい、とどついて来て、クラス中の感嘆の声が耳に届いた。

やってしまった、と思い内心溜め息をつくしかなかったが、特に何事もなく、先生に褒められるだけで終わった。

そのまま、授業の終了まで、心中穏やかではなかった。

会話の内容が気になって仕方がなかったが、隣に座る彼は全くいつも通りの態度を突き通す。

聞かれているなんて知らない彼に、それを聞く事も出来ない。

もしかしたら、自分とは関係ない話である可能性も存在した。

しかし、判りたくない事ほど判ってしまうものなのだ。

「おい、灰原！」

少し荒い声が右から聞こえると同時に、顔をあげると怪訝な表情を浮かべる彼が居た。

いつの間に授業が終わっていただろう。ぽかん、と教室を見回すと、彼は更に眉を顰めた。

時計の針は、丁度つい先ほどチャイムが鳴った事を示していた。

「おめー……昼休みに何かあったか？　今の時間、ずっと心ここに
あらずだっただろ」

呆れ顔で吐息をつかれると、バカにされているようで少しむつと
した。

大体、誰のせいなのだろうと、彼に責めるような視線を送りながら
も、すぐに気持ちを切り替えた。

「別に、何もなかったわ」

こういうときは、動揺しているのが気づかれない自分の性格をあ
りがたく感じるものだ。

彼はそそくさと帰り支度をはじめ、何もないなら早く帰ろうぜと笑
みを浮かべた。

小学生の授業は五時間までだから、授業が終われば皆下校。

判ってるわよ、と言われるがままに荷物を纏める様子を、教室隅に
居たカチューシャの彼女が、ただじっと眺めていた。

悲しい微笑を浮かべながら。

その日の帰り道は、探偵団の皆が一緒だった。

いつもは殆どない並び方だった。前の三人は男組。そして、その数
歩離れた後ろに、彼女と二人で歩いている。

前を歩く彼は、サッカーボールを操りながら、時折ちらちらと振り
向いた。

少し真面目な顔で話す様子が、心底気になっているのだろう。

この並び方になったのは、そもそも隣で俯く歩美が提案した事なの
だが。

「……歩美ね、全部知ってるよ」

突然呟いた彼女の言葉に、自分達の間だけ時間が停止したような感覚を受けた。

ただ地面を見ている彼女の表情は分からなかったが、とても真面目な声だった。

その真面目な声が、ただの下らない話ではないと悟らせた。

何を全部なのか、上手く理解はできなかったけれども、思い当たるものはあった。

哀しく微笑む彼女の顔が、やはりそれを肯定している。

「どうして？」

尋ねると、彼女は再び目を伏せた。

無言の時間というのは、無駄に胸をざわつかせるもの。

そう考えながら、哀はただ続く彼女の言葉を待った。

俯いた表情の見えない彼女の口元が、小さくゆっくり動く。

「ごめん。哀ちゃんには、言いたくない」

「え？」

彼女にしては珍しい突き放すような台詞に、再び吃驚させられた。何か怒らせるような事も思いつかない。

「哀ちゃん、五時間目様子おかしかったでしょ、あれって……コナン君のせいじゃないの？」

思い切り凶星をつかれて、ドキッとした。

心拍数がドキドキ、いつもの倍以上にうるさく響いている。

小学生……しかも二年生相手に、何を狼狽しているのかと思うけれ

ど。

それでも、思っている事をどんぴしゃで当てられた気持ちは上手く静かに戻せない。

「そ、そんなんじゃないわ」

「……嘘だよね？　こういう話題で、歩美に嘘ついてほしくない」

うろたえながらも出した応えに、またも冷たい声が振った。

ある意味、探るような雰囲気、いつもの彼女とは違うような口調。

「吉田さん？」

顔を上げた彼女は、どこかとても寂しそうに見えた。

前を歩く三人が和気藹々と歩く中で、彼もまた振り向いて複雑そうに目を顰めた。

何を話しているのか、気になって仕方ない、というような表情で。

それに気づいた彼女は、唇をかみ締めた。悔しそうな表情で。

「ずるいよ。コナン君も哀ちゃんも、嘘ばかりで誤魔化して」

「ちよ、さっきから話が見えないわよ？」

この幼い彼女に、こんなにおされた事があったかどうか。

いや、薄々わかつている。彼女のそんな態度のわけを。

そして、自分が彼女におされているわけも。それは何よりも、彼の事だから。

「だって、歩美はこんなにコナン君の事好きなのに、かなわないんだよ？」

なのに、気持ちを通じ合える二人は、誤魔化してばかり、気づかないふりしてばかり！」

つい、さっきよりも大きな声を張り上げてしまったのだろう。
潤んだ瞳から一粒涙こぼれ落ちたのを、驚いて振り向いた前の三人もぎよっとして見つめた。

「あ、あ……歩美ちゃんっ!? どうしたんですか?」
「オメーら、喧嘩したのか?」

心底びっくりしたのだろう、戸惑いがちに声をかける二人とは対照的に、その話の中心に居た彼は、眉を顰め、目を細めて、こちらを眺めていた。
哀しい表情で、ただじっと立ち尽くしていた彼は、ぽそりと何かを呟いた。

群がる二人に、顔を上げた彼女は笑顔を作った。

「何でもないよ! ね、哀ちゃん」
「え、ええ」

同意を求めるその必死な瞳に、つい頷かされる。
いつの間にふき取ったのか、その頃には彼女の目にも頬にも涙のあとが残っていなかった。
彼女を見つめながら、哀はいつか彼に言った言葉を思い出していた。
”彼女を泣かせたら許さない”と。

「泣かせてるのは、私ね……」

自嘲する笑みを零して、誰にも聞かれるつもりのない小声を発した。

一年という月日が、周りを少しずつ変化させていたとするならば。

やはり、不変なものなんてないのかも知れない。

時の流れに人は逆らえないもの、と自分で言った言葉を思い返し、確かにそう思った。

変わり続けていく世界が、変わらない筈だったものまで変えてしまったのだから。

FILE03..『キモチとケジメ』（後書き）

☆作者より☆

第三話もまた、お読みいただけて幸せですv

気分転換と書き始めたシリーズ、楽しい勢いのままあちこちで復活できれば、と言う考えももちつつ。

歩美ちゃんが今回のお話の大部分を占めてますね^^;

私の気持ちでは、哀ちゃんと歩美ちゃんはおくまで対等な親友同士
と思ってますので。

だから、歩美もあんな言いたい事丸々言ってます。

次の話辺りで、そろそろコトを起こそうかと。

予定より二話三話増えるかも知れませんが、もし上手くいくなら変わ
らないかも知れません。

でも、もし最後まで読んでいただいて、楽しめたな、と思えるお話
が出来たら、私は凄く幸せですv

慣れない事だらけなので、本人全然自信なくて、出すたびビクビク
ですけどね（^―^;）

でも、一話一話、一文一文、精一杯の頑張りはありますので！次話
でもまたお会いできたなら幸せですvv

それでは、今回もまた、有難う御座いました（^ー^*）

FILE 04..『ウソとナミダ』

何とか納得させた光彦と元太を元通り先に行かせた。

再び、前に男三人、後ろに女二人と別れて、歩く道中。

先ほどよりも少し増した気まずさに戸惑う哀に、彼女は苦笑した。

「ごめんね、歩美さっきそんなにきつい話し方しちゃったかな？」

「そんな事ないわ。安心して」

小首を傾げて話す声と口調が、いつも通りの彼女で安心した。

だから、哀は少し目上のようないつもの立場でそう微笑んだ。

けれども、彼女はもう一つ付け加える。

「でも、逃げてる哀ちゃんとコナン君は、やっぱり嫌だもん。

だから、言った事なかった事にはしないよ！ 哀ちゃんだって本当はわかってるんでしょ？」

「……そう、ね」

判っているんでしょ、と聞かれた事に対して、何を、なんて質問は野暮だ。

哀には判っていた。必死な彼女が何を伝えたいのかも、前を歩く彼の事も。

昼休みの終わりに聞こえてしまった会話が、おかしいほど引っかかっていた一つ一つを繋げてしまった。

思い上がりだと、何度も何度も、自分を誤魔化そうとしていたのだけれども。

そんな思いが手遅れな程、判ってしまったのだ。

「吉田さん、心配してくれたのね。ありがとう」

「……もう、嘘ついたりしないって約束してくれる？」

上目遣いで懇願してくる彼女は、何だか可愛らしかった。ふ、と静かに笑みを作って頷くと、彼女は喜色満面の表情を返した。彼女に誓ったその言葉に、嘘なんてなかった筈だった。

途中で探偵団と別れ、彼と二人きりの道を歩く。

アスファルトの道路から反射する熱に不快さを感じながら、行く道を曲がって。

もうすぐ彼とも別れる近くまで来た時、黙り込んでいた彼から話しかけられた。

「もしかして、オレが言った事、気にしてんのか？」

「えっ？」

唐突な質問に、ぐるぐる巡っていた思考がピタリと停止した。同時に、足も停止する。

彼もいつの間に、リフティングをやめてそこに立ち止まっていた。穏やかな口調は、どこか申し訳なさそうにも聞こえた。

「歩美から、何聞いたんだよ？」

「何でもないわよ。ただ、素直になれって言ってたわ」

何から、という部分はとっばらって応えた。

じっと見つめてくる視線に耐え切れずに、目を逸らして髪を耳にかける。

そうか、と自嘲的な笑みを浮かべた彼は、数秒考え込んだ。

「工藤君こそ、彼女に何か言ったの？」

「……まあな。あ、いや、誤解すんじゃないぞ。組織とかそういう話じゃねーからな」

どうしてそちらに話が行ってしまうのか、彼の鈍さは時に不思議に思う。

微塵も浮かばなかったその彼から出た単語に、ただただ嘆息が漏れた。

「判ってるわよ、そんな事」

「なら、いいけどよ……」

切り出しにくそうな話が見たいことは、彼を見ていれば分かる。だから、急かす事は逆効果だと、哀は口をつぐんで彼の次の言葉を待った。

「だから、その。突然あんな事言って悪かったな。どう思った？」
「どうって……」

そう聞かれるのは、不快に感じる。

散々引っ掻き回した心を、更にごちゃごちゃにするつもりなのか、と。

頬をかきながら、困ったように彼は続けた。

「ないと思うんだけどよ、歩美が……オメーはオレの事好きなんだって。そうなのか？」

カッと、顔が熱くなったのは気のせいではない。

平常心や冷静さを装うのは得意な筈なのに、と表情を変えずに必死で気持ちを収めた。
ざわつく心に、静まれと必死で命令を送る数秒間、さすがに何も言葉には出せなかった。

「なあ、灰原」

急かすように、名前を呼ばれても。

ドキドキうるさい心臓を収めるには、まだ時間が必要だった。
待っていても、この場面ではもう平常心は戻ってこない。そう諦めてから、小さく息を吐いた。

「バカね。小学生の女のカンを信じるの？ 平成のシャーロックホームズさん」

言うてから、先ほど約束を交わした彼女に心の中で謝った。

少し、声が震えてしまった事を後悔したが、彼は気づいていないらしい。

少しほっとした彼の表情が浮かんだのと同時に、曖昧な笑みが口元をゆがめた。

「やっぱり、気のせいだよな……？」

そんな返し方に、ほんの少し確かめなくなった。

まるで、恋心を抱かれている状態が、よっぽど都合が悪いようなその態度に。

「そうだったら、どうするの？ 私が、もしあなたを好きだったとしたら」

言葉にしてから、どっと切ない思いが胸を支配した。

ぎゅーっと締め付けられるほど苦しい思いは、それが叶えてはいけない事と知るからか。

困らせてしまうならば、冗談で済ませよう。そう浮かんだ考えに、昨日の彼を思い出した。

じっと、此方に向けられた慧眼が、微かに細められた。

目の前の彼に、切ない空笑いが浮かぶ。

「……それならそれで、オレは別の答えを出さなきゃいけないのかもな」

「どんな答え？」

その問いに、明確な答えは返ってこなかった。

さあな、とだけ言った彼は、今度は凄く強い視線を向けた。

強いけれども、正解がわからず立ちすくんでしまった迷子のようにも見える視線で。

「でも、どんな道に進む事になっても、無碍に出来ない存在が居るんだ」

「……知っているわ」

再確認させられるのは、既に居る彼の大切な存在。

それからは、何か言いたそうに、口を開いては閉じる彼を数秒だけ眺めた。

言葉が見つからない、と言った所。

そんな珍しい挙動を見せる彼を見ていたら、いつの間にやら穏やかな気持ちになっていた。

先ほどもで、響いていた鼓動はどこかに消え、ただ口元には静かな笑みだけ浮かぶ。

「悪いわね、いい加減立ち疲れたんだけど。そろそろ、帰らせてくれない？」

「あ？ あ、ああ、そうだな」

彼は慌てて腕時計に視線をやって、随分とそこで話し込んでいた事実気づいた。

悪い、と謝ってくる彼の言葉を、いつも通り軽く流す。

もう、その目前にある角でお互い家へ向かう二つの道に別れるのだ。そうしたら、全て終わる。

「……じゃあね、工藤君」

微笑して別れを告げると、彼もまたどこか戸惑いながら返事をした。

くる、と進むべき方向へ顔を向きなおし、背に彼の気配を感じながら歩いた。

彼は何も気づいていない、哀はそう自分の胸に言い聞かせながら、ほんの数百メートルを歩いた。

もしも、彼を好きにならなければ、最初から何も変わらない筈だった。

もしも、彼がそんな冗談を言わなければ、全ては狂いださないう筈だった。

そしてもし、昼休み終了前に、あんな会話を聞かなければ、あの楽しいままの関係であれた筈だったというのに。

哀は、そんな事をぐるぐると考えながら、家路をひたすら歩いた。

ドミノ倒しのように、たった一つのきっかけで、全てがパタパタ崩れていってしまうのだ。

けれども、自分の胸に浮かんだ結論に、後悔や迷いなどはもう、なかった。

ただ、哀しさによって頬を伝う涙は、どうにも止めようがなく。家へ帰るなり、トイレにでも入っているのであらう博士に挨拶もせず、彼女は地下室へ直行した。

戸を閉めて、ふらふらパソコンの前まで向かう。

そこに置かれていたフロッピーディスクを手に取り、抱きしめながら、そのままその場に泣き崩れた。

「そんなに、図々しいことって、ないわ」

ぽつりと、言葉が漏れた。

彼を待ち続けた彼女は、もうずっと前から彼と両想いだった筈だった。

思いが叶う前に、彼の体を縮めて彼女から引き離れたのも自分。

一年間も、そのまま元に戻せなかったのも、薬が完成できなかったから。

「でも、それなら、私に出来る事は一つだけ……」

そのせいで彼が変わってしまったとしたら。

いや、変わり始めているとしたら。

「さよなら。工藤君……そして、灰原哀として知り合った皆。」

椅子に座って涙を拭い、パソコンに電源を入れた。

もう、どうにも戻れない短く幸せな時間は、きっと最初で最後の神様からのプレゼントだった。

ならせめて、幸せだった場所を守る為に、最後の頑張りを見せよう。

その場所に自分が居る事が出来なかったとしても、明るくて暖かかった大切な場所を守ろう。

そんな思いを感じながら、彼女は只管手元のキーボードを叩いた。

FILE 04..『ウソとナミダ』（後書き）

☆作者より☆

朧月です、今回もまたお会いできた事を嬉しく思いますvまたお読み下さって、有難う御座いますゝ（ハ－ハ＊）

えー、いつも私の予告は外れるもので（ハ－ハ；

5話じゃ終わりません（＞□＜；絶対無理です！！（汗）

だってさ、次5話だし、仕上げた5話は思い切り途中だし（笑）えーと、でも10話以内には終わる事とは思いますが！

うん、それは信じてもらっていいと思う……Maybe^^；

さて、今回。

一生懸命な歩美と、複雑なコナンと、傷ついた哀ちゃん。

皆に共通するのは、三人とも必死な所でしょうか。

こういう、恋愛関係では（私が書く話だと）必ず一度は酷い役になるよね、コナン（新一）。

鈍さゆえ、奥手さゆえの過ち……

哀ちゃん、アソコで泣かせるのもやりすぎだったかなーとも思ったのですけれど、ここは泣いてもらいました。

その方が気持ち伝わるかなって。

コナンの気持ちと、コナンが言いたいこと。

薄々哀ちゃんは勘付いてるのですよ。哀ちゃんは、コナン君と違って、鋭い子だと思うから。

あ、もちろんうぬぼれの意味じゃなくてね？

だから、無碍に出来ないって言った気持ちも分かっています。

結構、哀ちゃんは自分が犠牲になる事で丸くおさまるなら……な所がある子だと思うから、そんな流れに達しました。って、すーっと読んできてそこまで判って下さった方がどれだけ居たかどうか…（へーへ；私の腕の問題ですけどね。

さて、それでは今回もお読みいただけて嬉しいです！

楽しく読んでいただけましたでしょうか…？

次回も、是非また見に来て下さると嬉しいです！

頑張りますvもし応援して頂けたなら、幸せですv

FILE 05..『ワカレとサイカイ』

「——ええ、お願いね」

電話機に向かって、小さく言った。応える相手の返事も確認してから、電話を切る。

必要な連絡は終わった。そう、たったこれだけで全てが終わる関係だったのだ。

博士との最後の晩餐は、普段より数段気合を入れた。

いつもより豪華な料理に、博士は相当驚いていたけれど、とても喜んでくれた。

食事中話した内容は、実はあまり頭に入っては居なかった。

ただ、楽しそうに先日までの事を話す博士に、いつも通りの相槌を打った。

学校はどうだった、給食は何を食べた、そんな話ばかりだ。

いつでも出来るような話だけれども、幸せである事を証明するような他愛なさがある。

それが普通に出来る、この場所が好きだった。

そして、楽しそうに言葉を返してくれる、目の前の人が好きだ。

けれども、何もかもこれで最後だ。

おやすみなさいとお互い部屋に戻る時が、今生の別れになる。

「じゃあ、哀君。あんまり夜更かししちゃダメじゃよ」

「ええ、そうね……ありがと、博士」

食事を終えた後は、あっという間に時間が過ぎていた。

機嫌よく笑う博士が自分の部屋へと向き直り、歩いていく後姿を見

つめた。

彼は全く気づいていないのだ。今のが、最後の会話になるという事を。

申し訳なさも感じるが、聞こえる事のない極小さな声で、おやすみなさい、と呟いた。

時計の針が、少しずつ角度を変えるのを、ただじっと見つめていた。

さっさと出た方がいいのは判っていたが、ぎりぎりまでそこにいたかった。

深夜の事だからと心配した相手が、家の前まで車で行く、と言っていたが、

騒がしくしたら博士に気づかれかねない、と却下した。

待ち合わせ場所は、駅。

相手は最後まで、補導されやしないか、変な事に巻き込まれやしないかと心配していたが。

「そろそろ、出なきゃいけないわね」

用意していた荷物を地下室から持ち出した。

玄関の前で靴を履き、家を出る前にもう一度未練がましく振り向いた。

ここで、目が覚めてからの一年間。博士に出会い、コナンにも出会った。

少年探偵団達と、ある時は楽しく笑いあい、ある時は知恵を絞りあった。

玄関から、暗くなった室内を見ても、楽しい思い出が残る場所だ。

「ありがとう、さよなら……」

最後の別れを告げて、家を出た。約束の場所へ走る。

道中、通りがかった探偵事務所も、三階の消えた電気を哀しく見つめた。

多分、もう寝ているだろう彼とも、二度と言葉を交わす事はない。凄く惜しい事に思えたが、その思いも断ち切り、駅への道を急いだ。たくさんものを教えてもらった、彼らや米花町との別れが、きつという方へ向かうと信じていた。

待ち合わせの駅まで、ほんの数百メートルほどの場所まで行って、少し息を切らした。

腕時計を見ても、ここまで来れば急がなくても充分間に合う、と判断する。

何もなければ、あと十分かそこらで駅まで着く筈だった。

しかし、ゆっくり歩きに切り替えて、進もうとしたその時、視線の先に分かれた道の向こう側に、見覚えのある後姿が映った。

「あの人……確か」

夜行性と言われるのは少し心外だが、夜活動する事が多かった分夜目は利く。

闇に溶けるようにカラスのような黒服を身に纏った、背が高めの男を凝視した。

昔あちら側に居た自分が、危険を察知する能力として身につけた、連中を嗅ぎ分ける嗅覚が警鐘を鳴らす。

「間違いないわ、アラック……」

組織に居た頃、面識があった男だ。

ジンのような高い階級の幹部クラスではなかったが、沢山の殺しは高く評価されている。

薬の研究にも何度か立ちあって、効能などを説明させられたりもした。

そんな男の出現に、一瞬迷った。駅に行けば平和にこの町を去る事が出来る。

「静かに、薬の研究も出来るのよ？　なのに今更、何を迷ってるの」

けれども、これは滅多に遭遇する事のないチャンスだ。

恐らくこれが、自分が判る範囲での、彼らに続く最後の糸となるだろう。

「ごめんなさい、彼らに繋がる糸を、離すわけにはいかないわ」

会う事を約束していた人たちに、気持ちで小さく詫びた。

少しでも、組織を切り崩すための手がかりになればいい。

それだけを願って、足音を立てないように注意しながら、男の後を追う。

子供の姿は便利だ。

いざと言う時は子供のフリをして、迷子になったとも言えば誤魔化せるだろう。

だから、ドキドキと平常心を失いそうになる尾行も大胆になれる。
男の後をつけているうちに、気づけば、駅からは大分遠ざかって
いた。

暗い路地を、たまに通る車のライトのみが照らす。

用心深く、自分の体を照らされる時が男の死角であるように、哀は
臨機応変に動いた。

ふと、目の前を歩く男は何かに気が付いたように立ち止まった。
自分の存在に気づかれたかも知れない、と一瞬心臓が止まる思いを
したが、どうやら違う。

男は、ズボンのポケットから震えるシルバーの携帯電話を取り出し、
耳に押し当てた。

「よー、ジンの兄貴じゃねえですかい」

掠れた声の男の口から出た名前に、心臓がはねた。

哀にとって、ジンとは幼少時代から、組織に居た頃は常に姉共々深
いつながりがあった。

そして、姉を殺した敵であり、今は恐れの対象だ。

それが今、すぐ間近にその存在があるとすると、硬直して、呼吸も
荒くなる。

「ちゃーっ。これから家直行する予定つけてたんですぜ？ 面倒な
んですがねえ。」

……なん、あの葉の事ですかね！ そんなら、喜んでそっち向かわ
せて貰いますぜえ」

会話の内容に、動揺して気が高ぶる反面、しめたと思った。これから、組織の施設がある場所の一つに、その男が勝手に案内してくれる。

しかも、男がそこまで興味を持つ薬というのは、すぐに思い当たり、確信出来た。

自分が作り上げたあの薬だ。

「工藤君……絶対、手にしてみせるわ。薬も、運命も、その先にある幸せも」

彼を元に戻す事が出来れば、彼との別れも必要なくなる。

工藤新一として、彼を彼女の傍に戻す事が出来れば、全て元通りになる筈だ。

灰原哀として、またあの居場所に戻れるなら、それが自分の幸せな未来だ、と。

そう信じて、堅く決意を秘めて、男の背中に誘われるがままに、その場所に辿り着いた。

男が入っていった建物は、とある薬品会社だった。

誰が薬の研究を引き継いだかまでは知らないが、そこで再び研究がされている事は違いない。

実際の薬と、あわよくばそのデータも手に入れば、解毒剤も完成するのだ。

想像すると、高揚していく気持ちが抑えきれなくなった。

もっと過去ならば、関わることも避けたであろう組織の本拠地に、自ら乗り込むとは。

一年で随分と彼に感化されたもの、と改めて感じながら、哀はじつとその建物を見つめていた。

FILE 05..『ワカレとサイカイ』（後書き）

☆作者より☆

朧月です、今回もまたありがとうございます！

そして、えーと、ごめんなさい。

レス関係まだしておりませんね。突然決まった事が思いのほか余裕をなくしてしまっています。

頂いたお言葉には、必ずレスはお返しますのでゝゝゝ

あ、評価もですけど、メッセも頂いております！

的確なご指摘ありがとうございますゝゝゝまだ携帯からざっとではあります、ありがたく読ませて頂いております。また改めてお返事致しますので（＾＾）

……過去と同じ過ちを繰り返さないためにも、嫌な気分になってお返事が遅くなっているわけではない、という事だけ先に説明しておきますゝゝ

さて、今回は……まあタイトルの通り、別れと再会と言う事で、組織との再会を。

毎度ながら、酒の名前には悩まされますゝ（＾＾ゝ；

ウィスキーとか簡単なのなら判るけど、何かイメージがいやで。

というわけで、今回はアラック。

喋り方は、何となく私の中で浮かんだ彼のイメージがあんな感じだったので、あんな口調に（笑）

アクセントは強めに、抑揚大きめに、かすれ声で話す感じを想像してくださいゝゝ

どんなのか判るかなあ……？（＾＾ゝ；

それにしても、やっぱりストックがある状態って執筆速度も変わりますね！

気持ちの余裕の問題かしら。他の、元から連載してたものも、ストック残したらもっと勢い出るかなうなんて。

関係ない話になってしまいましたが、謎は謎のままにはしませんので、ご安心を（＊＾―＾＊）

その辺は、私の腕次第ね。それでも、日々ぐるぐる考えて、成長はしてるのですよ？（笑）

……してるでしょ？（＾＾；

まあ。考えすぎて、堂々巡り十まどろっこしくなっちゃう所は否定しません＾＾；うん。

というわけで、次話でもまた宜しくお願い致します！

もしも反応いただけましたら、執筆の力に変えさせていただきますねv

FILE 06..『センニューとクスリ』

男がそこに入って行った後、一刻程はその場で考え込んだ。

ようやく、遂行に移さんとする作戦の輪郭と中身が整ったのは、既に二時を超えていた。

そこへ入った男やジンは、そこで一夜を過ごすつもりかも知れないが、まだ出て来る様子を見せない。

哀は小さく息をついて、鞆から数個のカプセルを取り出した。

それは、本当は研究の為に持ってきた。

決められた期間とは言え、彼の体を元に戻した薬だ。解毒剤の試作品。それによって、元の体に戻れば、潜入も可能になる。

薬品の研究所の中で子供が居る場合は数限られているであろうから、どうあっても目立ちやすい。そう考えた末に思いついた方法だ。比べて大人の体ならば、変装の手段だっていくらでもあるのだ。

丁度、研究所を出てからどこか少しでも隠れていられる場所で子供になれるタイミングが望ましい。

そのまま、用意しておいた子供の服に着替え、大通りに出て人ごみに紛れれば何とか逃げられるだろう。

手に入れたアポトキシン4869の現品によって解毒剤の研究を完成させ、

見つけたアジトは、彼にこっそりと知らせる手段は幾らでもある。

そうすれば、後は組織の事を何とかした彼が工藤新一に戻り、全てはハッピーエンドを迎える。

「絶対、その流れにもって行ってみせるわ！　それが一番、最善の道よ」

哀は自分自身に囁き、決意を更に固めた。

灰原哀になってからめぐり合った沢山の人と居場所。

願わくば、ずっとそこが暖かい場所であって欲しかった。

一緒におそろいの買い物をして、対等な立場で話し合える友達も出来た。

いざと言う時、一人一人頼りになる仲間も出来たし、家族も、好きな人も出来た。

一つ、恋が実らない事があつたとしても、何にも縛られずにその中に居る事が出来たら、幸せだ。

「お姉ちゃん、私だって……未来を夢見てもいいのよね？」

ごく、と息を呑んだ。もう、ココまで来たら前に進むしかない。

決められた時間内に、全てを終わらせる事が作戦を成功させる条件だ。

その為になら、最大限の努力をするのだと、心に誓った。

「私だって、幸せになりたいから」

決行は、明後日の日暮れ前だ。

頭に浮かぶ乗り込んだ後のシミュレーションを頭に何度も確認しながら、手に持ったカプセルを一つ、口に含んだ。

予兆が始めてから、用意した大人用の白衣に着替える。

月明かりにだけ照らされながら、胸に伝わる激しい衝撃を必死で堪

えた。

熱くなった体の熱が冷める頃には、疲れ切った宮野志保の体がそこにあった。

そのままふらふらと近くの街へ出向き、持っていたお金の全てを使って、志保はホテルのベットにうずまった。

時間は早く過ぎるものだ。その時が来るまでは何度もある場所の近くまで足を運んだ。

研究所のつくりを調べたり、そこで扱っている薬品を調べたりもした。

そこに潜入する為の、白衣調達や、自分の姿形を整える事等も。

「黒髪も、悪くないかしら？」

手鏡に映った姿を見て、はにかみ笑いが零れた。

悪いとは思ったが、昨晚背格好が自分と似ていた黒髪女性が研究所から出て来るのをつけて、襲った。

組織でも科学者の一人だった彼女には見覚えがあったから、イメージも作りやすい。

睡眠薬で眠らせたまま、ガムテープで口をふさぎ動けないように監禁したのは多少行き過ぎかも知れないが。

アクセサリーなどを拝借し、それをつけた宮野志保の顔でホテルを出て、近くのトイレで変装した。

研究所の正門から、堂々と中に入る。

途中、話しかけられたりするのをあしらいながら進んだ。

手に入れたカードキーで、一番奥の戸を開く。

カードキー以外通れない戸から先は自然な迷路のように、いくつか行く道の選択肢が用意されていた。極秘の研究をするには、なるほど丁度いい場所だ。

「辿り着いたわ、ようやく」

置かれた一台のパソコンと、色々書かれたラベルのついたファイルや資料の山に、つい口元がにやけた。

組織に居た頃の、シェリーと呼ばれていた自分が研究していたのと酷似した部屋だ。

つん、と感じる薬品独特のにおいも、懐かしさすら感じる。

「……監視カメラの位置は大体わかるけど、とにかく自然に振舞わないとね」

四隅、それと上にも一つと言った所か。

念には念を入れて、後二つ三つ取り付けられていると考えた方がよいだろう。

「急がないとね」

たくさんある棚のどこかに例の薬が眠っている事も判る。

ただ、今は一先ず目前にあるパソコンの電源を入れた。

キーボード上に置いた手が緊張と興奮でカタカタ震えそうになるのを、何とか抑える。

”Shellingford”

記憶の中にあったパスワードでファイルを開けた事に胸を撫で下

ろした。

液晶画面に羅列された暗号のような文字列を、志保は無言のまま読み進める。

段々と、記憶が蘇ると共に、薬の構造が頭に確実なものとしてインプットされた。

これを、パイカルの成分から作り出した解毒剤のデータと照合しさえすれば。

「作れるわ……やっと、完全な解毒剤が！」

一応、カメラから隠れてコピーしたそのデータを持ち出した。

同時に、もう一つ必要なその薬の現物が頭に浮かんだ。

部屋の中にあるだろうが、膨大な棚の中だ。

監視カメラに見張られた中、それを探すだけの余裕は、時間的にも技術的にもない。

「仕方ないわね」

浮かんだ手段は、少々危険なものだったが、仕方がない。

薬を製造して、在庫をとり溜めているその場所から、薬を盗み出す事。

ここから更に向かいの戸を開けて、地下に降りた場所にその部屋がある。

ドキドキ無駄に早くなる脈にうっとおしさを感じながら、意を決して立ち上がり戸を開けた。

下に行くに連れ暗くなる階段の前で、小さな深呼吸を一つして、気持ちを整えた。

成功した先に待つのは、天国だ。

しかし、失敗した先に待ち受けるのは、死という闇の世界である。
降りていく一段一段が、志保には酷く重く感じた。

FILE 06..『センニューとクスリ』（後書き）

こんばんは、今回もまた有難う御座います！

少し間が空いてしまいましたね、先週先々週と忙しかったものですから、すみません！

リハビリで一週間開けるって、意味あるのか？って感じですね（ハ

ハ；

今回は、第七話とのツナギです。

天国に行くか地獄に行くか、何となく想像はつくかなあ？

というわけで、今回はきつと私の一番書きやすい流れです！（笑）
って言えば、判る人には判る。

に、しても。哀ちゃんになじみが強いせいか、志保の事も気が付いたら哀って打ち込んでいたりして、アホな子です（ハ―ハ；

多分、見直してるからなと思うんだけど。あったらゴメンネ、こっさり教えてやっても構いません。

こういうツナギって、実は一番苦手だよ><

あ、レス遅くなっていますが、これ投稿終わったら本当に返しますの
で！

いつも本当にスミマセン&ありがとうございます！！

今回、またお楽しみいただけましたでしょうか？

いつも、私はなれない事をする度、面白く読んで頂けるかな、と不安でなりません><

また次回も是非是非、よろしくお願い致します！！

FILE 07..『アラガイとイヘン』

階段を降りた奥の部屋には、微かな灯りがついていた。その中に、うごめく人影は見えない。

心拍数が上昇するのを感じながらも、志保はゆっくりその戸を開いた。つんと、先ほどよりも強く葉の香りが鼻をつく。

「この部屋、懐かしいわ。A P T X 4 8 6 9の研究を引き継ぐために生まれた部屋ね」

奥の棚に、マジックでA P T X 4 6 6 9と書かれたダンボール箱を発見した。ドクン、と心臓がはねた。まさか、こんなに早く見つけられる等とは考えていなかったのだ。そう思いながら、歩み寄る自分の足音が、やけに大きく耳に響いた。

その時、それだけ響く自分の心音と足音が、他から来る情報を妨げて居たのかも知れない。

警戒心よりも、目の前の棚に目が言ってしまった事が、一番の迂闊だった。

そのダンボールに手を伸ばしたその時には、中の袋に入れられた十数粒の葉が見えていた。

「工藤君！ ……やったわ、私やっと！」

袋から数粒のカプセルを手にして、ぎゅっと握り締めた。口元が思わずほころぶ。そして、その大願成就の喜びは、同時に油断と隙も生んだ。だから、無機質な音と共に左胸の上辺りが熱と赤黒い液体を噴出すまで、それに気づかなかった。

手にしたカプセルが床に零れ落ち、咄嗟に手を伸ばしたところが、

急にふっと暗くなった。影が動くと同時に、カツン、と自分以外の足音が耳に届いた。

「お帰りという言葉がふさわしいかな？ S h e r r y……」

「ジ……、ジン！」

いつもと同じく、カラスのような服を着て、彼はそこに立っていた。此方を向く黒い銃口は、彼の口元に浮かぶ笑みと同様、いつもながらに冷たく感じた。

どうしてバレたのかよく判らないが、彼は既に自分の正体を確信している、それだけはよく判った。

「くっ」

散らばって転がった薬を拾おうと伸ばす手に、もう一発。

熱い風穴があげられたその腕では、少し手を伸ばせば取れる薬まで届かない。

袋に入った他の薬は、立ち上がらなければ届かない。左胸に居った傷は、それを許そうとしなかった。

「ふっ、無様だな、シェリー。何故そこまでその薬が欲しいのか知らないが」

冷たい声が降る。そもそも、こんな展開になった以上、その薬を再び手にしたところで無意味なのだ。

折角叶ったはずの思いが、こうも簡単に打ち砕かれてしまうものなのか。そう感じたと同時に、涙が滲んだ。

「そうね、私よ、ジン。久しぶり……ね」

変装の為につけていた髪をとり、素のままの姿で向き合った。ジンは嘲笑を浮かべ、その銃を僅かに傾けた。

「懐かしいぜ、シェリー。お前のその赤みがかった茶髪を拝むのもな。

聞かせてもらおうか、お前が危険を冒してまでこの薬の元へ舞い戻ったワケを」

悔しさに、食いしばった歯が「ギリ……」と嫌な音を立てた。

「ワケなんてないわ！　どうしても、私が作った薬の末路が気になったの。

自分が途中まで創った薬だから、独自に完成させたかった……それだけよ」

自分が考えつける、精一杯の言い訳だ。冷たい瞳のジンは、信じてなどいないだろう、数秒間はただじっと志保を見つめた。

「ふっ、まあいい。こうしてお前が自ら殺されに戻って来た事だしな」

彼はそう呟くと、ゆっくりその撃鉄を下ろした。ガス室に閉じ込められた時のように、何日か猶予を与えるつもりなどはないらしい。

「そうね、こうなってしまった以上、覚悟は……出来てるわ」

まあ、当然の事か。

目を瞑りそう思った時、いつも隣で勇気付けてきた少年の顔が頭をよぎった。

……工藤君、ごめんなさい！ 約束、守れそうにないわ。

心の中で、彼に謝罪した。元に戻る薬を作ると、そんな約束を交わした彼へ。

持って帰ると決めた薬すらも、彼の手には渡せない。かつて運命から逃げるなど言った彼、いつも諦めずに闘っていた彼の顔や声が、強く浮かぶ。

私、諦めようとしてるの？ 諦めない、頑張るって決めたのに。

記憶の中の彼は、必死で何かを自分に訴えているような気がした。志保は流血しながら下ろした手の指に、そっと力を込めた。指が動く。体だって、まだ動かせる。それなのに、死を受け入れようとしている自分がいる。

「さらばだ……シェリー」

引き金にかかったジンの人差し指が動く。それと、ほぼ同時だった。

いやよ！ と、自分の心に強い叫びを聞いた。まだ、何も努力していない。それなのに、その銃口から弾が噴出すのを、ただ黙って認めるなんて、絶対に嫌だ。

「あああああああああー！」

自分でも驚くほど、大きな叫びが口から漏れていた。そのままの勢いで、彼の体にぶつかって行った。銃口から発射された弾は、見事に床にめり込んだ。
体当たりは、彼にとって大したダメージではなかったろう。ただ、

予想もしなかった反撃と叫び声に驚いたのは、志保自身だけではなかったという事。

「じ、冗談じゃないわ！ まだ、私には抗える力があるのに。」

「シェリー……貴様、何のつもりだ？」

「私だって、一年間で成長したのよ！ あなたの銃を奪って、あなたを撃ってでもココから抜け出すわ」

窮鼠猫をかむ、という言葉もあるが、まさにその状況だ。追い詰められれば、ジン相手でも力づくで抵抗する事はある。そして、その力は何より強い。彼の腕から銃を奪う事だけに意識を集中させれば、それだって不可能ではない。

「け、形成逆転ね！ 大勢に囲まれたらやばかったけど、幾らあなたでも丸腰なら」

奪った銃をジンに向けて言った。壁越しに背をつけて、ふらつきながら立ち上がる。銃を向けられた目の前の男は、また嘲笑うように口角をゆがめた。

「フン、確かに貴様にしてはな。椅子に座って薬の研究に勤しむだけの女と思っていたが」

「諦めが悪くなっただけよ。ある人に感化されてね」

そう応えて、引き金を引いた。足に一発、肩にも一発間髪居れずに撃ち込んだ。相手は丸腰とは言え、ジンド。一瞬の猶予も与えたら逆転される。上手いように大怪我は避けたようだけれど、足に入った銃弾によって、さすがに彼は膝をついた。

「……飼い猫に咬まれた気分だな」

「バカね、野良よ。一年も前に捨てた飼い主が、よく言うわね」

撃鉄を下ろした銃を突きつけながら、袋にある葉から数粒を、再び手に取った。

そして、ゆっくり彼の手の届かない道を回る。そのまま階段を上がって、すぐには追いつかれない位置まで来てから、やっと銃を下ろした。

左胸と腕は痛むが、まだ行ける。胸の傷は、幸い肺も心臓も傷つけてはいないらしい。ただ、流れる血に少しづつ力を奪われながら、余力の続くまでに何とか外に出ようと、必死で進んだ。

その時、まだ志保は気づかなかった。自分の体に起きている、二つ銃で負わされた怪我とは、全く別の変化に。

「何、これ……」

異変にようやく気づいたのは、出口に程近くなった頃だった。まだ足音しか聞こえない追っ手くらいは撒けると高を括っていた部分もあった。しかし、出口へ向かう最後の戸を開けたその場所で、志保はついに動けなくなった。

カシャン、と音を立て、銃が手から滑り落ちる。そして、壁伝いに自分を支えていた膝も、どさりと床に着地した。

「あ、うう……くっ！」

体が熱い。そして、それに気が付いた頃には、激しい動悸にどうにも動けなくなっていた。

何とか、それでも少しずつ前に進めればと必死で体を動かしたが、どうしてもそこから動けなかった。

ただ、喘ぎ声と熱い吐息だけが口から漏れる。銃で負った傷の痛みも忘れる程、苦しい。

段々と聞こえる足音が大きくなってくるけど、隠れる場所すらない。でも、こんな所で元に戻ったりしたら。

「くどー……く、んっ」

ちゃんと、計算しつくした筈だった。こうならない為に必死の思いで。

まあ、自分は別に幼児化がばれた所で構わない。けれど、彼はどうなってしまうのだろうか。そんな考えがぐるぐる頭を巡る。

足音が、自分のすぐ横の戸まで来た時、もう駄目だと確信した。

戸が空くと同時に、苦しみは頂点まで達し、そして自分の体が縮んで行く感覚を覚えた。

「いやああああああー！ー！」

思わず口から出た苦しい叫びが、その建物内で響き渡っているように感じた。

FILE 07..『アラガイとイヘン』（後書き）

☆作者より☆

というわけで、間髪あけずに第七話の投稿です（^^）

これぞ、一番私のかきやすいストーリー☆（まで）

VS組織の時は、ジンの兄貴はやっぱり絡めないと。ウォッカは出さない事も多々あるね、私（ごめんよウォッカ……^^;）

さて、志保ちゃんには凄く頑張ってもらってます。

でも、兄貴を振りきったすぐ後にはお決まりのアレが待っていた、という事で。さてどうなってしまうのか、な所で次話に回します（

（^^*）

ああ、楽しいなあ、この展開書くの♪

この話は、多分今までで一番早く書きあげました^^何だか、シリアス度が強くなればなるほど、私もノってくるみたいです（^^

▽^^;

一生懸命な志保ちゃん、是非是非応援していただきながら、次回もまた読んでいただけたなら幸いですV

それでは、楽しくお読みいただけましたでしょうか？（^^）また

次話でもお会いできる事を祈って、今回も有難う御座いましたーっ

☆

FILE 08..『アガキとサイゴ』

倒れている小さな体に、視線が集まっている。朦朧とする意識の中で、かろうじて動かせる右手で、手探りに落とした銃を探った。指に触れた堅い何かを、何とか余力を絞って握り締めた。

「ふ……そういう事か、シェリー！　どうりで我々が八方探しても見つからないわけだな」

聞き覚えのある声が、哀の耳に届いた。先ほどまで対峙していた男、ジン。おかしように、狂ったように笑う声が、体の幼児化を見られてしまった事を悟らせる。

「……う、まだ、諦めないわ」

カタカタ震える手で、声のする方に銃口を向ける。けれど、そんな状態の幼い少女に、更に鉛弾を撃ちつける事など、彼らにとって造作もない事だった。

右手に一つ、そして倒れたわき腹にも一つ、銃痕が増えた。流れる血が、残った微かな余力さえも奪う。

「何も出来ないで終わってしまうの？」

小さく、絶望の呟きを零した。手からずれてころころ転がったカプセルに、必死で手を伸ばす。折角、努力で掴みかけた結果なのに。しかも、幼児化の事までバレてしまう最悪の終わり方。

「やっぱり、ダメだったの？　私じゃあ、想いを叶える力が足りない

かったの？」

何か上から話しかけて来る男達の声なんて、既に哀の耳には入っていないかった。

ただ、目に映るカプセルすらもぼやけて見えて、届きそうでも届かない指先に、何とも泣けた。段々浮かんでくる涙で、更に視界はゆらゆら歪んだ。

「ごめん、なさい……工藤君、結局こんな結果……」

何度も口からこぼれる謝罪の言葉は、楽しい記憶の中心にいつも居た彼へ。

脳裏をよぎる彼の幻覚は、優しさと哀しみの入り混じる表情で、沢山哀に話しかけた。

”ばーろ、謝ったってどうにもなんねーだろう？　だから、諦めんなよ、灰原。ほら、オレがついててやつから。もうあとほんの少しだけ、頑張れ。幸せに、なりたいんだろ？”

「どう、頑張ればいいのか？　私、もう動けないのに」

”オレがついてるつつただろ？　頑張るのは、生きてく希望を捨てんなんて意味なんだからよ”

「……捨てないわ。捨てたくない！　目の前が完全な闇に包まれるその時まで」

頭の中の幻覚の彼は、ふっと笑った。それと同時に、自分と呼ぶもっと現実的な大声が、耳に届いた。こんどは、幻ではない。

「灰原ア！」

聞き間違えう筈もないその声は、確かにたった今までまどろみの中で会話していた彼だった。一気に、意識が浮上する。とは言っても、クリアな状態とは程遠いものではあるが。

小さい身体のまま、江戸川コナンのまま、彼はそこに乗り込んできたのだ。

「どうして……?」

何が起きているのか理解できないのは、別に意識が薄れている事とは関係ない。

その場所が判った経緯を問う意味と、何故そんな身体で乗り込んで来たのかと責める意味の両方を、その眩きに込めた。

「説明は後だ！」

一直線に走ってきた彼によって、哀の身体は持ち上げられた。

全速力でそのまま出口まで駆ける彼を我に返った組織が撃ち倒そうとするのを、室内に踏み込んだ見覚えのあるFBIの面々が追撃した。

少し離れた場所まで来て、彼はそっと、哀を下ろした。応急手当だけ施しながら、ゆっくり自分の膝に、哀の首を乗せた。

「もうすぐ、救急車が来るから、頑張れよ！　それまで、オレがつ

いててやつから」

「いいの？ 工藤君……行かなくて」

周りはFBIに囲まれている。てっきり自分をそこに置いたら、彼もまた中に踏み込むと思っていた哀にとって、その状況は不思議でならなかった。

「ああ、大丈夫。FBIの人たちが踏み込んでくれたし、その中には頼りになる人が居るから」

「そ、そう。工藤君がそういうなら、安心ね」

数秒間、沈黙した。気まずい雰囲気がある場所に流れ、ぎゅっと抱きしめる彼の腕が、段々力を増してくる様子を感じていた。

「なんで、何でだよ！ 突然消えるような真似しやがって。そうしたら、オレに何の相談もしねーで、こんな危険な所に一人で乗り込むなんてよ！」

その声は、怒気を孕んでいた。まあ、あんな普通の別れから、突然消えたら誰だってそうなる事は当たり前だ。

「ごめんなさいね……ちよっと、思う所があったのよ」

「あ？ なんだよ、思う所って」

「さあね、自分の胸に、聞いてみればいいんじゃないかしら……？」

段々、意識が薄くなっていく感覚を感じた。気づけば、ろれつも少し回らなくなってきた。意識は次第に薄れて、また彼に会う前のような状態に落ちていった。

朦朧とする意識の中で、彼の必死の呼び声が聞こえていた。

「工藤君。私、やっぱりもう、駄目みたい……精一杯、頑張ったけど」

「おい、何言ってるんだ？　バーロ、しっかりしろよ。灰原っ、灰原アアアア……」

その後、上手く思い出せない意識の中で、彼と何か会話を交わした。そう、灰原哀は、必死で努力した結果、幸せな最期を遂げる事が出来た。

すごく、嬉しい程必死な彼を見た。自分がこれから、死んでしまうその事実が惜しくなる程に。伝えるだけの事は伝えだし、奪ったカプセルも手渡した。最期まで一生懸命呼びかけてくれた彼の声は、しっかりと哀の耳に焼き付けられた。

意識がない中で、必死で思った最期の願いは、彼にしっかり届いたかどうかは判らない。しかし、もしも天国にいる彼女の姉に届いていたなら、叶えてくれる事だろう。

せめて愛した皆は、暖かい場所に生きてね。そしてその暖かい場所で、一緒に過ごした一年間は、心の片隅でいいから、ずっと、楽しかったものとして皆の中に生き続けて。

ありがとう、こんな沈んでいく世界の最期に、会えてよかった。

すごく、幸せだった。

暗くなった意識の中で、哀は彼に何度も何度も語りかけていた。もっとも、声に出せていた自信は半分半分。その、声にはならなかった願いがもしも届いたなら、灰原哀の頑張りには、暖かで幸せな終わりに繋がったのだ。例えば、自分が居なくなっても、意味のある終わりだった。

救急車の音と彼の叫び声だけが、何も語らなくなった哀の意識にずっと、響いていた。

FILE 08..『アガキとサイゴ』（後書き）

☆作者より☆

えー、こんにちは。いつもありがとうございます、朧月です！

リハビリとして始めたお話ではありますが、もうラストも間近に迫っている、という事で。

コ哀（の要素があるってだけですが）にしたのは、リフレッシュした気持ちでリハビリできるようになのですが、作ってとても楽しいですv

哀ちゃんがどうなるのか。そして、コナンとは一体どうなるのか。次でお話は一気にラストへと向かってゆきます。

で、思った方居るかもしれません。

まだ、明かされていない謎、散りばめた伏線が回収されていない部分、沢山あるぞ！？と。

さて、それについては性質の悪い事に、わざとやっております（笑）謎も何も残さないで進める描き方は出来たけれど、つくづく、読者様への謎かけが好きな奴です。（推理小説とか書けないくせにねく笑）

それについてはもちろん、明かします。約束しましたからv
どんな形で明かされる事になるのかは、お楽しみですけどね^^

というわけで、一話から今回の話まで、あがける範囲の最後まで、哀は頑張っていたと思います。哀ちゃんの頑張り物語が主題テーマなので、まだあがく余地はあったんじゃないの？って印象が、この話までで、皆様の心から全て消し去れたなら嬉しいのですが…>

もちろん、最初にしたお約束は破りません^^

どんな形のラストを迎えるのか。次もまた是非お読みいただければ幸いですv

今回は、有難う御座いました！今回もまたお気に召していただけましたでしょうか？^^

もしも反応を頂いた際には、執筆の力に変えさせて頂きますねv

FILE09..『イツワリとシンジツ』

目を開けた世界は、やたら夢のように白濁しふわふわとした感覚があった。きつとそこがああの世なのだと思うのは、開けた視界の先に、とても見覚えのある姿が見えたから。長い髪をふわりとなびかせた、姉の姿が。

「お姉ちゃん」

哀が呼びかけると、彼女はふわりと悲しい微笑みを浮かべた。哀しいけれど優しいその微笑を見ると、やけに目頭が熱くなった。その胸に思い切り飛び込んでいきたいくなる。

「お姉ちゃん……っ」

泣き崩れて温もりの中に飛び込んでいった哀だが、そのまま身体がすり抜けた。自分達には実体がないという事なのだろうか、と妙に納得させられた。しかし、明美はゆっくりと口を開いた。

「ダメよ、志保。……誓ったんでしょ？ 生きて、幸せになる事を」「でも、でも結局出来なかったの。だから、ここに来たの……でも、私最期の最期に、幸せを手に入れたのよ？」

だから、後悔する終わり方じゃなかった、と哀は自分の心で続けた。しかし、明美は尚悲しげな笑みを変える事はない。膝を突いた哀の隣に、そっと腰を下ろした。

「お姉ちゃん？」

「……私はね、志保。本当はもっと生きて居たかったの。好きな人

だって居たし、あなたとも別れたくなかったよ？ でも、どうしても死んでしまった。もう戻れないの」

明美の閉じた瞳から、すーっと、一筋涙が落ちた。その様子を、目を見開き見つめる。

「でも、でもね、志保が生きていてくれたから、お姉ちゃんも沢山のものを見れた。幸せだったんだよ？ 一緒に見て来た、江戸川コナン君、吉田歩美ちゃん、光彦君、元太君、博士」
「みんなとの、思い出」

哀が呟くと、やっと悲しみとは違う柔らかい笑みが、明美の顔に宿った。

「そう。一緒にずっと見て来たの。そして、志保が生まれて初めて恋した事も」

その言葉に、哀の頬は熱く赤らんだ。最期までずっと耳と目に焼き付けた姿が頭に浮かぶ。後腐れない別れだった筈が、不思議とその姿に泣けた。涙が、一粒二粒と頬を伝う。

「工藤君……っ、くどうくんっ」

「そう。志保にもまだ、生きていたい理由が沢山あるのよ。伝えてない思いだって」

諭すように話す彼女に、哀の中で少し反発が芽生えた。

「どうして、どうしてよ！ 今更生きたいと思ったって、私にはもう！」

泣いてすがった。掴めない彼女の服のすそを、掴んでるように握り締めて。

「……だって、まだ志保は死んでないもの。でも、少しずつ死を心と身体で受け入れてしまってる。生きたい意志が消えた時、本当にこっちに来てしまう」

「死んで、いない？」

聞き返すと、姉は優しくゆっくり頷いた。そして、まっすぐ前を指差した。指差された方角の、哀の後ろ側に当たる場所に、道が繋がっている。

「戻って、志保。あなたはちゃんと幸せを掴まないとダメ。ちゃんと自分に素直になって？ そうすれば、素敵な未来が待ってるからお姉ちゃんも、ずっとまたあなたの隣で見続けるから」

涙が止まらなかった。確かに姉の指すほうには道が見えて、多分自分は意識がないままそこをずっと歩いて来たのだと思う。まだ、受け入れてはいけなかったのだ。本当の最後まで。

「お姉ちゃん……お姉ちゃんっ！ 私、素直になっていいの？ 暖かい場所に居続けたかった、願いは叶うの？」

「うん、お姉ちゃんは、志保の事見守りながら、ずっとずっと応援してるよ。だから、私の分も……ね？ 志保」

その道に向かって、とん、と背中をおされた気がした。いつの間に体をそちらに向けていたのか、驚いて振り返ると、そこに姉は居なかった。ただあるのは、暖かい雰囲気のみ。

「お姉ちゃん、ありがとう。本当はずっと、一緒に幸せになりたか

ったよ！」

涙を流す哀の耳に、最後に「そうだね」とほんの微かな姉の声が聞こえた気がした。それだけで、先に進む勇気になる。

前を見据えて、哀は地を蹴り走り出した。その道の先に辿り着く事だけを考えて。

病院の、薬品臭いニオイがした。起き立てでぼんやりする意識の中では、白く明るい電気が凄くまぶしく感じた。思わずうめいて目を細めた哀の身体に、何かの重みがかぶさった。何だろう、と首を持ち上げた瞳には、彼が映った。

「よお、目え醒めたんだな」

「……江戸川君。そう、私本当に助かったのね」

「バーロー！　そう簡単に死なれてたまるかってんだよ。ったく、紛らわしい事言って人を心配させやがって」

むつつり顔をしかめて、そう話す彼は、すねているように映って少し笑えた。同時に、幸せも感じた。そうだ、ずっとこんな関係を求めていたのだと思い出す。自分からそれを捨てて別れようとしていた事が信じられない。

その部屋に自分と彼が二人きりである事実を確認した哀は、痛みを感じながら体を起こす。そして、シニカルに笑って見せた。

「バカね。ふ、本当にいつも私の冗談を真に受けるから、面白いわ、工藤君は」

「じ、冗談なのかよ!」

「ええ、そう。あなたと同じよ、真面目な冗談」

その話題になった途端、彼が息を呑む雰囲気を感じた。

「あのさ、それは……その」

珍しくどもる雰囲気。よっぽど触れて欲しくない話題なのか。でも、素直になるとあれだけ約束した。親友と姉と。

「私、あの冗談の返事まだしてなかったわよね?」

「へ?」

「好きよ、私あなたの事。言っておくけど、友達とか仲間としてじゃないから」

ここまで来れば、ドキドキも何もかも乗り越えて冷静にもなる。だから、その台詞もあまりにあっさり口から出た。けれど、真面目な顔で話している事で、目の前の彼にはそれが真剣な話だと充分伝わったようだ。十数秒の間の後、彼は小さく息をついた。

「……冗談で済ませられたら、楽だったのにな」

「私も、冗談で済ませたかったけど、どうやらそうさせてくれない人が沢山居るから」

「そうだな」

項垂れている彼の口元が、仕方なさそうに笑っていた。

そうしている間に、わらわらと戸の向こう側がうるさくなってくのを感じた。彼もその音に気づいて、静かに小さく息をついた。

「皆来たみたいだぜ。続きはまた、だな」

「ま、待って！ 私、まだあなたの口から、何もはつきりした事聞
いてないわ」

勝手に話を切られそうになって、慌てて呼び止めた。入れ違い様に病室から出ようと思っていたらしく、戸に手をかけていた彼は、くるりと振り向いた。口元には、悪戯を仕掛けたばかりの少年のような笑みが浮かんでいた。

「ちゃんと言っただろ？ オレ」
「……………は？ え？」

彼の言葉に、哀は戸惑いの返事を返すしかなかった。予想した反応だったのか、クスクスおかしそうに笑う彼に、むっとする。

「どういう意味なの？ やっぱ、結局冗談って事？」

途端、謎が解けた時に彼がよくする不敵な笑みが顔に映った。目を閉じて、静かに彼は呟いた。

「……………さあ、な」

意味が判らず哀が混乱したのも一瞬の事だ。次の瞬間には、彼は後ろ向きで片手を振りながら部屋を出て、入れ替わるように、知っている顔がどっと室内に押し寄せた。

「哀君、今そこでコナン君とすれ違ったぞー」

「灰原さん、ケガの具合どうですか？」

「うな重食えば、んなもん一秒で治っちまうぞ！」

「もー、元太君じゃないんだからね？　コナン君も、歩美たちが来たからって帰る事ないのに」

皆、口々に話す言葉のせいで、その病室内は一気に遠足のような明るい賑やかな雰囲気になった。彼は出て行ったまま帰らなかったが、少し後に学校帰りの蘭や園子も花を手に面会にやって来た。

数時間後、夕焼けに照らされながら、病室の中で一人になった哀は一人ぼーっと窓の外を眺めていた。彼と最後に会話したその内容だけは、必死で悩んでも中々答えが浮かばない。

彼が、何を「言った」のか、あの不敵な笑みの意味や、「さあな」という言葉の裏側も。

「退院までに教えてくれなきゃ、承知しないわよ？」

解けない謎が気に食わないのは、何も生まれながらに探偵である彼だけではない。

灰原哀、小学二年生の夏。好きな相手に、入院中ずっと悩む謎かけをされる事になるとは。

「覚えてなさいよ、工藤君」

引きつった笑みが浮かぶ。けれど、こういう日々は悪くない。彼の事で悩むのは、なんだかどんどん元気が出るから。だから、頑張っ
ってよかったと哀はベッドの上で改めて実感した。

ああ、ただもしもこの願いが誰かに届くのなら、どうか彼の気持を、私に教えて。

そんな哀の切実な願いは、そう遠くない時に彼自身の口によって、叶えられるのだ。

FILE 09..『イツワリとシンジツ』（後書き）

☆作者より☆

どうも、こんにちは、朧月です（ハハハ）

そして、第九話、コレが事実上の最終話です。

で、どうせなら十話までしてしまおう、と企んだ朧月は、このまま終わらすのも申し訳ないので、エピローグとして、後記との間にクッションをふわんと入れたいと思います。

もしかしたら……日曜のうちにエピローグもアップしてしまうかも知れませんが（ハハハ）；

さて、皆様としては、この展開を予想した方もいらつしやると思いますが、前回の展開から騙された！と憤怒されている方もいらつしやると思います（笑）

はい。コレが、『私の一番描きやすい展開』です（笑）

哀ちゃん、結局助ける展開は一番最初から実は決めてあったのですが、ご納得いただけましたでしょうか（ハハ）

中には、殺した方が現実的でよかったと思われる方も居るかも知れませんね。

そして、引きずって来た謎は一話一話と、明かされる事なく増えてきました。

そして、今回の話においても。

恐らく、コナンの言った言葉の意味が判る方は居ないでしょう。

もちろん、謎を謎のままにする気は更々ありません。けれども、一体裏で何があったのかを読者の方に推理していただけたなら、幸いですV

というわけで、今回もまた有難う御座いました！

いかがでしたでしょうか？（＾＾）もしも、気に入って頂けたのであれば幸いです。

次話はエンディングのようなものですので、締めとして、どうか最後までお楽しみいただければ幸いですV

エピソード..『ミライとオモイデ』

入院して二週間たつ頃には、傷ももう完全に癒えて、退院していい許可も出た。傷の治りは、大分早かったらしい。面会に来た彼は、これも薬の影響かとからかうように言う。

「きつと薬とは少し違うわ。突拍子もない話だけど、私ね……お姉ちゃんに会ったの」

「え、灰原の姉さん？ 明美さんの事か」

突然切り出した話に、彼は少しだけ目を丸くした。別に、彼に伝える事に深い意味があったわけではない。ただ、彼には何だか話したかった。

「多分、私は死ぬほうに向かってたと思うの。でも、お姉ちゃんがまどろみの中で勇気をくれた。いつも隣で見守ってくれてるからって」

「へえ。そりゃー、あれか？ 臨死体験ってやつ」

「さあ？ 夢だったのか、本当にそうだったのかは判らないけど」

幻でも何でもいい。ずっと会いたかった姉に、こんな形で会って励まされるなんて、凄く幸せだ。

もう数時間後には退院する最後の病室は、この二週間で大分思い出が詰まってなんだか名残惜しかった。窓を背にそんな病室を見つめながら、彼と向き合い、話していた。

「だからね、私幸せになりたいって思ったの。そんな願い、明日から本当のものになるのね」

「……ああ。絶対、幸せにしてやるよ」

さりと彼の口から出た言葉に、思わず赤面した。すると、彼はぶっと吹いた。

「ちよっ、工藤君!？」

「いや、オメーこういうネタにはホント耐性ねーんだなって」
「か、からかったの？」

つい赤くなった顔のまま反論すると、彼は悪戯っぽく笑んだ。

「からかってなんかいねーよ、バーロ」

「あなたって、その無駄に女たらしな所直せないのかしら？」

「……悪かったな、末期症状なもんでね」

呟いてそっぽを向いた彼の子供みたいな姿に、笑いを堪えた。

「何よそれ! 少しは改善しようと思わない? 名探偵さん」

「思わねーな。それに、オレは本当にからかってねーよ。約束した
だろ?」

と言われても、約束した覚えなど無い。

「……約束って何? 再会してから会話が噛みあわないわね」

「まあ、忘れてんならもう一度約束だ。これから先のオメーの人生
は、絶対幸せにしてやるよ」

力強い笑みが、心臓を鷲掴みにした。どう幸せにしてくれるのか、
未来を凄く楽しみに思うのは、哀にとって珍しい。

「知らないだろうけど、オメーが居なくなっただって聞いた時動揺し

たし、必死だったんだ」

「え？」

「自分で冗談にしたけど、一番冗談に出来なかったのはオレなんだよ。だから」

腕を引っ張られた、と思ったのと同時に、彼の両腕の中にすっぽり体全体が納められた。

「オレの事好きだって、あの日病室で言った事が本気なら、絶対もう離さねーよ」

「く、工藤君っ!？」

耳に届く彼の鼓動が、ドキドキしているのが伝わった。

「……まあ、オメーは寝言でオレの名前呼ぶ位だから、もうどっか行く心配はねーか」

「ちよっと、調子に乗って嘘言わないで。私があなたの名前なんて」

「自覚が無いなら、それでもいいけどよ？」

「え、ちよっと……どっち？」

「さあ？」

にやっとした笑みが彼の顔に浮かぶ。どっちつかずな態度に気まぐさを感じて俯いたが、彼が声を押し殺して笑うのに釣られて、哀自身からも笑いが漏れた。そのまま二人で顔を合わせて笑う。病院の中が明るい笑い声に包まれていく。最後にまた、思い出が出来た。

それから、月日は過ぎた。一年間かけて創り上げた完全な解毒剤を、ついに彼に渡す。

阿笠家に彼を招いたその日、いつもよりもめかしこんだ格好で出迎える準備を整えていた。一年間で、変わらない関係も、少し変わった関係もあった。

探偵事務所の彼女と彼との間は、後腐れなくいい関係を貫いていくらしい事に安心した。そして、自分自身もいつの間にか彼女と仲良くなっていた。どこか姉の面影を重ねながら。

わだかまりが残るのではないかと心配した小さな親友とも、つい数ヶ月前また同じクラスになった事を喜び合って、隣の席で楽しく談話する日々。

そして、江戸川コナンと灰原哀の関係は、出会った頃から比べると、随分と変化を遂げた。

チャイムが鳴る音と同時に立ち上がる。彼が来た事を確信して、大急ぎでドアに向かう。

「よ、もうすぐ夏休みも終わりって時に、時間取ってくれてありがとな」

玄関先で、彼は片手を小さく上げて、笑顔を浮かべた。

「それで、どう？　どうするか決心はついたの？」

「勿論さ」

作った完全な解毒剤を手にとり、彼の前で開いて見せた。もう、体が縮んでから二年以上経つ。今の彼がどんな選択肢を選んだかは判らない。それでも、灰原哀として彼とした約束でけじめでもある薬は、どちらにせよ必死で完成させた。それは、シェリーを断ち切

って、新しい一步を踏み出すためのもの。

「ありがとな、灰原。最後までつくり上げてくれて。それから、お疲れ」

「ええ」

彼の手が解毒剤へと伸び、それを大切に握り締める。

「この薬は、灰原とオレの絆だ。オレ自身、断ち切る決心はついた。」

「断ち切る？」

「ああ。中々手を離せずに居た、もう一つの大切なものをな。行くべき道を見つけたから」

彼の瞳は、まっすぐ未来だけを見ていた。そんなどこまでも前向きな彼が出した結論が、どんなものであったとしても幸せだ。

「絆を、必死で守ってくれてありがとな」

「此方こそ。なんだかんだ言って凄く感謝してるわ。それで？ その薬どうするの？」

「決まってるんだろ！」

にっと笑った彼の顔を、哀は穏やかな気持ちでしばらく見つめていた。これからの、楽しい生活が浮かぶ。彼がどんな姿であったとしても、隣で笑い、隣で励ましあえる生活。今もずっと強く願うのは、そんな暖かな日々がずっと続いていく事だ。

そして、誰よりもそれを願ってくれた姉が見守ってくれる中で、叶わなかった分も一緒に幸せになれば、それはすごく素敵な事。

エピローグ..『ミライとオモイデ』（後書き）

☆作者より☆

えー、短い間では御座いましたが、本当にどうも有難う御座いました！！

というわけでどうもこんばんはーVV

うーわっ。えっと、まずは予告一週間遅れになってしまった事をお詫びします><

終わり方が中々納得の行くエピローグにならなかったのと、もう一つの理由があって、遅くなりました。

プロローグが一人称で、一話からも哀ちゃん側から進めてきたこのお話ですが、そうしようと決めた時、実はもう一つの野望が生まれてしまったんです^^;

そして、その野望はリハビリとして最高のもので。

ただし、その一つの野望を叶えるために、大変な苦勞をさせられる羽目になってしまいました（笑）

エピローグの終わり方だったらもう……；何度直しいれた事か。不自然じゃなく、謎かけして終わらせるってだけの事がこんなに難しいとは（^―^；

そう、このお話は、そもそも見てもらう事よりも、本来リハビリを考えて、短期集中として始めました。

だって、ホラ。コ哀要素という割に、途中まで殆どそんなもの無かったでしょ？ しかもそもそも別のCPとして書いてる私が、実は前書き読んだだけで誰にも見てもらえないかもしれない覚悟もしてたりしました^^;

でも、やるからには出さないとどうにも書く意欲がわかずで、実際ちゃんと読んで下さってる方に驚きと幸せを感じて、最後まで書き上げましたv

反応一つ一つ、びくびくしながら、そんな私に的確なご指摘や、嬉しいお言葉をかけて叱咤激励していただけて凄く嬉しかったです♪なので、見てもらうからにはどこかに楽しむ要素をつけなければならぬ。だからこそ、その野望の事も頭に入れて、楽しく読めるお話を目指しておりました。

さて。最後まで読んできて、凄く不思議に思われませんでしたか？私があれだけ、謎は謎のままにしない、と言った言葉に随分矛盾してやしないか、と。
そこです！

謎の部分に、実は一番気を使って苦勞していました。どう明かすかではなく、どう問いかけを残すか、という部分。
つまり、どこまで謎かけをするか、という部分です。
それが、その『野望』に繋がるものなのです。

もしも、いい意味で謎の部分の余韻を残せたのであれば、私はとても本望です。

もしも、中途半端さの方が先立って、余韻も何も残らなかったとしたら、それが一番悲しいかな？

と、言うわけで！

謎は謎のままにしません、という言葉に全く嘘はありません。勿論、約束をお守りしましょう。

さあ、ここまで言ったら私の野望の正体、理解していただきましたでしょうか？

謎を残したかった全ての思いは、この野望を楽しんでいたきたかった事にありますv

ここまで言えばお判りと存じます(^^)

このお話の裏舞台。そう、哀ちゃんではなくコナンの視点から、一つ一つ紐解いて行きたい、と思ったのです。

このお話を最後まで読んで下さった皆様に感謝しております、ので、勿論必ず見て！とは言いません。

興味が無い、面倒くさいのであれば、悲しいですがここで、ご愛読有難う御座いましたの挨拶で、お別れです>>

ただ、もし謎の答え合わせをしてくださる方や、コナンサイドからに興味を持って下さった方は、是非そちらでもお会いできれば幸せですvv

わう、空き缶が飛んできそうな予感><びくびくっ。

というわけで、一先ずは。

最後まで、お読みいただきました皆様、有難う御座いました(^^*)

レギュラー連載のものも頑張って行きますので、どうぞこれからもよろしくお願い致しますv

それでは、お付き合いくださった皆様に感謝の意を込めて！

2007/9/17 追記。

判り辛いので、此方よりご案内いたします。

上でお話した野望、つまりコナン視点よりのお話は、『N6833C』の⇒<http://ncode.syosetu.com/n6833c/>にて。『この願いが届くのなら……』[裏]〜Side Conan ver.』としてこちらの連載終了と同時に連載スタートし、書かせていただいております^^
どうぞ、宜しければお楽しみくださいませv

B
Y
朧
月

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5200c/>

この願いが届くのならば……

2010年10月10日14時19分発行